

# 「音等」と文法的単位

萬 清 華

## 目 次

- 0. まえがき
- 1. 音 等
  - 1.1. 音等の提起
  - 1.2. 音等の設定
- 2. 語 素
  - 2.1. 語素の成分——語元素
  - 2.2. 音等語素
- 3. 語とその類型
  - 3.1. 文においての語
  - 3.2. 語の類型とその形式特徴
- 4. 文中の自立語変体と助語
  - 4.1. 語助と自立語変体
  - 4.2. 助語とその文法意味
- 5. 構文単位としての語の構造
  - 5.1. 重音等語の構造
  - 5.2. 次重音等語の特質
- 6. まとめ
  - 6.1. 文法的単位
  - 6.2. 文法的単位のグループとそのグレイド

## 0. まえがき

0.1. 従来の中国語文法研究は、漢字言語にもとづいてなされていて音声言語そのものにもとづいていなかった。そのことが、中国言語研究のより一層の発展を妨げる大きな原因となっていると思う。

音声言語に関する考察によって、中国語においては、声調のほかに、もう一種類の非音質的超語音「負荷辨義者」——音等が存在していることが明らかとなる。そこで、音等を語素に含まれる「超語元素」という文法的単位として、「二類四等」のように分け、意味に対応する語音にもとづいた文法論研究を現代中国語に適用しようと試みた。

この研究は、二十世紀七、八十年代以降、次第に形成されつつある中国の「規範的普通語」（或いは、標準語）を対象とし、文法構造、意味構造、および語用構造の三つの面に対して、語音構造の面から、現代中国語文法研究を目指すものである。

0.2. 本文では、紙幅に制限があるので、以下の問題：音等、語素、語とその分類及び構造に限って簡要に論じる。最後に、文法的単位とそのグレードについてまとめた。

0.3. このように「音等」（音声言語における四種の非音質成分——音高、音勢、音長、停頓の総和）を含めて、音声言語の文法的単位を帰納すると、語素はすべて音等を含む「音等語素」になる。このような語素は最も小さい文法的単位ではなく、もっと小さい音質的語元素と非音質的超語元素に分解される。

文においての語は音等によって、四種類に分けられ、重音等自立語 ( $W^1$ )、次重音等関係語 ( $W^2$ )、次軽音等助語 ( $W^3$ )、軽音等語助 ( $W^4$ ) のようになり、重音類に属する自立語 ( $W^1$ ) と関係語 ( $W^2$ ) は構文単位で、軽音類に属する助語 ( $W^3$ ) と語助 ( $W^4$ ) は構形単位であることになる。

そのうち、構文単位としての語の構造は四種類：内部屈折、重音転移、附加（重迭を含む）、複合が考えられる。

文において、語（複合語を含む。以下同じ）は音等上、「前重型」の特徴をもつ（前綴と転義を除く）。それと対立する「前次重型」のようなものは、語の上位単位：詞組（「単語連結」を含む。下同）と思われる<sup>(注1)</sup>。

音声言語において、語と語の間には、いずれも切れ目がある（単純語でも複合語でも）。一つの言語「片段」に、切れ目がなければ、その「片段」は一つの語としか認められないが、一つの詞組の中には、必ず切れ目が存在する。また、詞組或いは単語連結とほかの語の間には、切れ目より大きな停頓（本文では、途切れと呼ぶ）が生じる。文の主題とそのほかの部分とを分ける場合には、このような停頓が用いられる。

中国語における文法的単位は、語元素(m)、語素(M)、語(W)、詞組(P)、詞組群 (Ps)、文 (S) に分けられ、文において、それぞれ一種の相補関係をもつグループを構成している（第6.節参照）。それらは四種のグレイド——語素、語、詞組、文グループとなり、それらグレイドの基礎は語元素グループである（第6.2.節参照）。

0.4. 文中で用いた例は自分で作ったもの、および趙元任、高名凱、朱德熙、呂叔湘、陸儉明、CHARLES N. LI 先生などの著作と文学作品、教科書、文法書から引用したものである。文中で一一注記しなかった。

各文法的単位の形式特徴とそれらの関係については、恩師松本昭先生のご指導により服部四郎先生の「言語学の方法論」に関する研究の方法を参考として、中国語の実態によって整理したものである\*。

その文法的単位の分類に関係がある中国語規範的普通語（音声言語）の語音体系については、別文で全面的に述べるつもりである。

(注1) ここで言う詞組はフレーズと異なり、文中の二つ以上の構文単位となる語の組合せを指す。単語連結は服部四郎博士の日本語における単語連結に準ずるものと考えてさしつかえない。

\*作成の際に、松本昭先生のご指導と貴重なご意見を頂いた。記して感謝申しあげる。

## 1. 音 等

### 1.1. 音等の提起

従来の文法研究において、文法的単位は、漢字表記符号によって決定されていた<sup>(注2)</sup>。したがって、文における小さい単位から、大きい単位の分類、および文成分の分類と、その成分と成分との間の関係、また、文構造の語順などが十分明らかになっていない。

例えば、広く知られている「咬死了獵人的狗」というような文は、大多数の学者によって二義性をもつ文と考えられている。そのような文はすべて文における語と語との間の関係には二通りのものが存在し、意味特徴にも二通りのものがあると見なされている。しかし、文を構成する単位に音声的な差異の存在することは認識されていなかった。そのために、これらは、二義性をもつ文としてしか考えられなかったのである（朱徳熙（1960）『句法結構』参照）。

だが、音声言語によって分析すれば、そのような文は、必ず二つ以上の文として理解される。例えば、上述の「咬死了獵人的狗」を例とすれば、これは異なる文法成分が構成した異なる文法関係と意味関係とをもつ三つの文に分けられる。したがって、それらの文には、二義性は存在しないことになる。

ここでは、特に音声言語における音高、音勢(或いは音量)、音長、停頓(或いは、切れ目、途切れ)という非音質的な、漢字によっては表記しわけられない要素の総和を「音等」と称する。それが意味の区別を可能とする機能をもっているので、超語音「負荷辨義者」という。この研究で音等を超語元素という文法的単位として提起した所以である。

音等を「二類四等」に分けて、それぞれに「重音類」、「軽音類」、「重音等」、「次重音等」、「次軽音等」、「軽音等」と呼ぶ。符号は、「 $\uparrow$ □、 $\downarrow$ □、.□、.□」を

(注2) 高名凱(1957)『漢語語法論』p.7参照。

用いる。(拙筆1995.aでは、音等を「軽重音」と称した。1995.bでは、「音等」に直し、音等符号は「 $\overset{1}{\square}$ ,  $\square$ ,  $\square$ ,  $\square$ 」のようにした。後に、松本昭先生の意見を参考して、「句法語音結構導論(修論)1996.1.8」では改めた。)

ここで、音等によって、前例を分析して見よう。

(1)  $\overset{1}{\text{咬}}$   $\overset{1}{\text{死.了}}$   $\overset{1}{\text{獵人.的}}$   $\overset{1}{\text{狗}}$  ((?)咬獵人的狗, 狗死)

((?)が狩人の犬をかんで死なせた)

(2)  $\overset{1}{\text{咬}}$   $\overset{1}{\text{死.了}}$   $\overset{1}{\text{獵人}}$   $\overset{1}{\text{的}}$   $\overset{1}{\text{狗}}$  (狗咬獵人, 獵人死)

(狩人をかんで死なせた犬)

(3)  $\overset{1}{\text{咬死}}$   $\overset{1}{\text{.了}}$   $\overset{1}{\text{獵人.的}}$   $\overset{1}{\text{狗}}$  (獵人的狗把(?)咬死了)

((?)をかみ殺しちゃった 狩人の犬が)

この例に見られるように、それぞれの文を構成する語の構造(文成分とするもの)に違いがあるので、別の意味を示す、別の文が構成されているのである。「W」で各種の語の構造を示せば、以下のようになる。

$W^1$ : 重音等自立語本体

$W^2$ : 次重音等関係語(該当するものなし)

$W^3$ : 次軽音等助語(ここでは文の構形形態を指す)

$W^4$ : 軽音等語助(ここでは語の構形形態を指す)

$W^{1+4}$ : 重音等自立語変体( $W^1+W^4 \rightarrow W^{1+4}$ )

$W^{c1}$ : 重音等自立語複合語<sup>(注3)</sup>

設定の符号で上例の三つの文を記入して見よう。

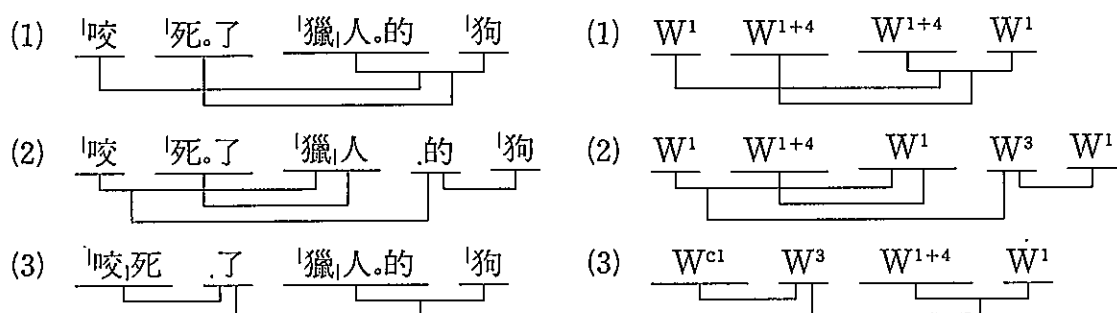
(1)  $W^1$   $W^{1+4}$   $W^{1+4}$   $W^1$  ( $W=4$ )

(2)  $W^1$   $W^{1+4}$   $W^1$   $W^3$   $W^1$  ( $W=5$ )

(3)  $W^{c1}$   $W^3$   $W^{1+4}$   $W^1$  ( $W=4$ )

この三つの文の中の語が異なるので、語と語の関係は必ず異なることがわらう。従来の文法分析は必ずしも正しく意味関係を示せなかったもので、これらの関係図も当然、改められる必要があるが、それは今後の検討課題とする。例(1), (2), (3)それぞれにおいて、語と語の関係は次の通り。

(注3) 複合語は語に属する。ここに、「 $W^{c1}$ 」で示すのは区別のためである。文の分析する場合には、「 $W^1$ 」で示すことができる。



例(1)の中の「獵人.的」と「狗」とは領属関係で、「咬」の対象は「獵人.的狗」で、死んだのもそうである。

例(2)の中の「獵人」は「咬」の対象となって、死んだものである。文中の「.的」は文の構形形態である助語となっている。その文法意味は認定と従属という意味を表す(第4.節参照)ので、ここで構成されたのは動作或いは行為と行為者との間に存在する、ある種の認定関係を表す。即ち、「咬死.了獵人」と、「狗」との関係を表す。

例(3)の中の「咬死」は複合語になり、「咬」と「死」は両方ともその複合語の中の語素である。「了」という助語(文の構形形態)の文法意味は完成と実現であり、動作或いは行為と行為者の間に、ある種の実現関係が表されている。したがって、例(3)の中の「獵人.的狗」は、その実現した「咬死」という行為の行為者である。文中では、「咬死」されたものは言わなかったが、文成分と文成分との文法関係が意味関係を明らかにしている。

## 1.2. 音等の設定

音等は音声言語における非音質的な音高、音勢(或いは音量)、音長、停頓(切れ目、途切れなど)、四つの面からの総和である。その設定は次の通り。

(1) 音声言語において、音量(音勢)は四種の程度に分けることができる(徐世榮(1980)『普通話語音知識』8参照)。それらはいかなる音声言語の中にあっても、明確な規律がある。それによって、音等を四種類に分けた<sup>(註4)</sup>。

(2) 音声言語において、音高と音長は音量の変化に従って変わる。

それら種々の変化によって、漢字で表記されるものを音節的と非音節的な

ものに分け、また、音節的なものを「四声」音節のものと「轻声」音節のものに分けた。例えば、「吃了」の「吃」は音節的な「四声」音節のものである。それは音声言語において、いかなる場合にあっても、重音等或いは次重音等に変わる時でも、「四声」音節のものである。「了」は音声言語において、次軽音等の場合と軽音等の場合がある。次軽音等の場合には、「了」は、音節的な「轻声」音節のものであり、軽音等の場合には、「了」は、非音節的なものとなる。

中国語において、いずれの音節（四声音節と軽声音節）も同じく発音過程と見なされる： $\frac{\text{声 調}}{\text{子音}^1 \rightarrow \text{母音} \rightarrow \text{子音}^2}$ （符号： $\frac{T}{C^1 \rightarrow V \rightarrow C^2}$ ）。「漢語拼音」は漢文字に注音する符号系統なので、実際の語音の中のある子音（子音<sup>1</sup>（C<sup>1</sup>）と子音<sup>2</sup>（C<sup>2</sup>））と個別母音すらも記入しないことがある。それら記入しない子音と母音をすべて「零位」とすることができる。

高名凱氏60年代初めに、実験器具で、ひとつながりの語音が発音される時の筋肉の緊張変化する状況についての考察で、「毎発一個音節、発音器官的肌肉都有一次緊張」と言っているが、それは先に増強して、後に減小するように思われる<sup>(註5)</sup>。もし、一つの漢字で表記したものが発音器官の筋肉の緊張を引き起こさなければ、それは非音節的なものである。「吃了」という語音を発音する場合には、発音器官の筋肉が一回の緊張過程しか起こらないので、「了」は非音節的なものとして、「吃」の音節の子音<sup>2</sup>（C<sup>2</sup>）部分に取り込んだものと考えられる。「吃」と「吃了」とは両方ともに単音節で、音節内部の子音<sup>2</sup>（C<sup>2</sup>）が異なるだけである。しかし、「吃了」を発音する場合には、発音器官の筋肉の緊張が二回起こる。ただ、緊張の増強と減小の程度、過程を

(注4) 趙元任氏(1968)は口語においてのストレスを重音と軽音二種類に分けた。その他に、対比重音があると言った。今日の初級漢語教科書では、ストレスを重、中、軽のように三種類に分けているが、研究によって、徐世榮の分類に賛成する。音量は重、次重、次軽、軽のように四種類に分けられる。二種類や、三種類などの説は比較的「粗略」ないかたであると考える。趙元任(1968)『A GRAMMAR OF SPOKEN CHINESE』1.3.6.参照。

(注5) 高名凱氏の観点と違う。点については筆者『句法語音結構導論』p.40~43に記入した。高名凱(1963)『語言学概論』p.58参照。

完成する長さが異なるのみである。「吃.了」と異なり、四声音節である「吃」と軽声音節である「了」によって構成されたものである（次節の「吃了」例析参照）<sup>(注6)</sup>。

(3)音声言語において、種々の停頓がある。文、複文中の分文、その他、幾つかの単語を含む文成分のようなものの前後の停頓が标点符号で示される場合があるが、そのほかに、标点符号のない語と語の間、単語連結や詞組や、また、ある種の文成分の前後にも意味を区別するために停頓が存在しうる。

それらの标点符号を用いない停頓は二種に分けて、一種は語と語の間に存在する停頓である。それを「切れ目」と呼び、“{”で示す。もう一つは、文の主題とするものと、文中の詞組、単語連結などの後に存在する停頓である。それを「途切れ」と呼び、“|”で示す。切れ目より少し長くなりうる。

次の例をあげて見よう。

- (4) 那.块|田 |我.們 {施肥 {吧  
 (そっちの畑は私達が肥料をやろう)
- (5) 他 |是|去年 |来 {日本 {的  
 (彼は去年日本に来たのだ)
- (6) 對|这.個|問題 |.的 {看法 {不|一致  
 (その問題に対して、見方が異なる)

上の例(4)の中の「那.块|田」は単語連結でもあり、文の主題でもある。その後には、途切れがある。「我.們」と「施肥」と「吧」との間に切れ目がある。「吧」は文の構造形態としての助語の一つである。第4.2.節「『表情』的助語」参照。

例(5)の中の「他」は、文の主題であるので、後には途切れがありうるが、もし、主題でなければ、次重音等の「他」となるべきである（代名詞は次重音等関係語に属する）。それによって、「他」が文中の主語であることが示さ

(注6) 楊成凱氏(1995)は言語学の元理論の角度から、「吃了」という例の中の「了」を構語の「了」と構文の「了」に分けたが、語音上の「音等」差異を区別しなかった。楊成凱(1995)『現代漢語語法元理論研究述要』語言研究 1995/2, p.13~24参照。



れる。主語の「他」の後には途切れはあり得ないが、切れ目はある。例えば、

- (7) 他<sub>1</sub>是<sub>1</sub>去<sub>1</sub>年<sub>1</sub> | 来<sub>1</sub>日<sub>1</sub>本<sub>1</sub> { . 的  
 ((彼は) 去年日本に来たのだ)

日本語訳に、例(5)の「は」と例(7)の「(は)」は表現上の重さが全く違う。中国語では音等で区別することができる。明らかに、この二つの例の意味重心が違う。

例中の「是<sub>1</sub>去<sub>1</sub>年<sub>1</sub>」は単語連結なので、後に途切れがある。一般には、「是」を特殊な動詞或いは準動詞などと解釈されているが、少数学者は、それを「虚詞」とする「判断語気詞」、「構造関係詞」(結構系詞)とも言っている<sup>(注7)</sup>。しかし、上述のいずれの観点も音声言語に相関することがあるとは言えない。音声言語が意味を対応する角度から考えると、音声言語において、次重音等の「是<sub>1</sub>」は当然、関係語に属すべき、その文法意味は指称関係を表すのであり、その後の名詞性をもつ語などと単語連結を構成する。ここの「来<sub>1</sub>」は移動動詞であり、「日<sub>1</sub>本<sub>1</sub>」はその移動の目的地である。実際に発話する場合には、「来<sub>1</sub>」より、「日<sub>1</sub>本<sub>1</sub>」の重音等はややひくくなり(次重音等になる)、「来<sub>1</sub>日<sub>1</sub>本<sub>1</sub>」のような気がする。そのような述語より音等の低くなるものを「補語」と考える(拙筆1995. b 参照)。音等と文成分についてのことは本文の主旨からはなれるので、提示するにとどめ、別文に述べる。例中の「的」は文の構形形態としての助語の一つである。第4.2.節の「『表知』的助語」参照。

例(6)の中の「對<sub>1</sub>这<sub>1</sub>個<sub>1</sub>問<sub>1</sub>題<sub>1</sub>」は単語連結でもあり、文の主題でもあるので、その後には、途切れがある。「不<sub>1</sub>一<sub>1</sub>致<sub>1</sub>」は否定関係語と自立語が構成した単語連結である。その前の語との間に切れ目がある。例中の「的」は助語であっても、語として、あとの語(「看<sub>1</sub>法<sub>1</sub>」)との間にも切れ目がある。

「日本語の途切れ方も多くの場合、中国語のそれと一致する。(4), (5)訳文参照。なお、興味深いことに例(6)の場合の日本語訳においても、“の”の直前に途切れをおき、“の”と“見方”の間をより連続して発話することもおこりう

(注7) 少数学者、例えば張世祿、高名凱など。張世祿(1978)『古代漢語』p.113~114 参照。高名凱(1957)『漢語語法論』p.89参照。

る。点に注目したい」(松本昭先生の指摘による)。

上述のように、音等を設定することにより、漢字表記では表せない真の音声言語形式の区分を明らかにすることができると考えられる。

## 2. 語 素

### 2.1. 語素の成分 —— 語元素

先に述べたように、中国語の語素は音質的と非音質的な二種の語元素を含んでいる。漢字符号で表記されたのは声調を含む音質的な語元素と見なすすれば、その表記されていない音等とは、非音質的超語元素というものである。その特徴と中国語の文法研究における重要性とを次の例で説明しよう。

例えば、「吃了」という漢字表記からは、「食べた」(食べるという動作が完成した)という意味も示せるし、また、「食べていないが、これから食べる」という意味も示しうる。音声言語において、音声的には、「吃{.了」というように、重音等の「吃」と次軽音等の「.了」となっており、「吃」と「.了」との間に切れ目が存在する。しかし、「これから食べる」という意味を表す場合には、音声的には、「吃.了」というように、重音等の「吃」と軽音等の「.了」の間に切れ目がないだけではなくて、「.了」は「吃」の音節の末尾に含まれていて、独立的な音節になっていない。その故に、「吃.了」は一つの音節としか認められない。軽音等のものは非音節的性格をもち、「吃.了」は「吃」というものの「変体」と考えられる。

以上を整理してみると、以下のように説明できる。

- (1) 吃 (食べる)  $W^1$ 
  - a. 四声音節
  - b. 重音等語素
  - c. 重音等自立語 (本体)
- (2) 吃.了 (食べて…, 食べよう, …)  $W^{1+4}$ 
  - a. 四声音節内部屈折

b. 重音等語素＋軽音等語素属性

c. 重音等自立語（変体）

(3) '吃< .了（食べた） $W^1+W^3$ （二つ単語の構成したもの。「'吃」と「.了」の間に切れ目がある。）

'吃（食べる） $W^1$ （(1)と同じ。(1)参照）

.了（～した） $W^3$

a. 軽声音節

b. 次軽音等語素

c. 次軽音等助語（文の構形形態）

上例から見られるように、中国語において、漢字で表記されるのは音声的言語の実態すべてではない。意味区分にとって重要な非音質的な部分は、音等——超語元素によってのみ示されている。

したがって、中国語において、文法上で、最も小さい文法的単位は、音声言語においては、語元素（超語元素を含む）となる。

語元素は四種類に分けられる。語元素の符号は  $m$  を用い、四種類の符号はそれぞれ、 $m^1$ ,  $m^2$ ,  $m^3$ ,  $m^4$  を用いる。次の通り。

語元素  $m$  の類型：

(1) 四声音節語元素  $m^1$ 。例えば、人，有，手，

(2) 軽声音節語元素  $m^2$ 。例えば、了(le)，的(de)，嗎(ma)，

(3) 非音節的語元素  $m^3$ 。例えば、(花)儿，(椅)子，

(4) 音等——非音質的超語元素  $m^4$ 。

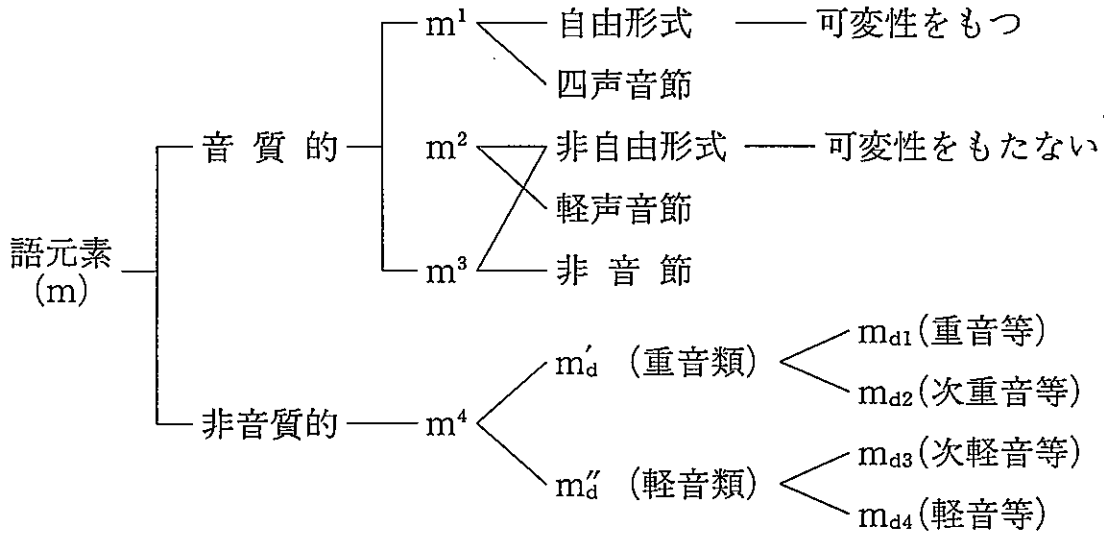
重音類  $m'_d$ ：重音等  $m_{d1}$ ，次重音等  $m_{d2}$ ，

軽音類  $m''_d$ ：次軽音等  $m_{d3}$ ，軽音等  $m_{d4}$ ，

標記：'□，<sub>1</sub>□，.□，.□。

語元素  $m \rightarrow m^1, m^2, m^3, m^4$  の形式特徴と関係は次のようになる。

図示1.



四声音節語元素は可変性をもつ。例えば、「亮」(liàng)は「月亮」の「亮」にした場合には、「~亮」(liang)に変わる。m², m³は可変性をもたない。

## 2.2. 音等語素

上述の通り、中国語において、漢字で表記されたものは、完全な語素に該当するかどうか明らかでない。音等が加わって、始めてそれが明らかとなる。したがって、中国語の文法的単位としての語素は音等を含む「音等語素」と言える。語素は四種の音等によって、四種類に分ける。

ここで言う語素とは音声言語の中の超音質的要素を加えたものなので、今まで言われている『語素』とは概念を異なる。

例えば、「花儿」は知られているように、一つの音節が二つの漢字で表記されているものである。しかし、音等で分析すると、四声音節と非音節とが構成した単一音節(変体)である、二つの語素(重音等語素M¹と軽音等語素属性M⁴)で構成される一単語と認める。重音等語素の「花」と軽音等語素属性の「。儿」との結合となる。「。儿」は「花。儿」そのものを構成する音節内部屈折を表す非音節的語素属性である。「。儿」は構語形態の一つと言える。このようなものは、「。儿」のほかに、また幾つかある(以下の語素の類型および第5.1.節参照)。

中国語における語素は音声言語の中の音等によって、四種類に分けられる。語素の符号は M を用い、四種類の符号は、それぞれ M<sup>1</sup>, M<sup>2</sup>, M<sup>3</sup>, M<sup>4</sup> を用いる。次の通り。

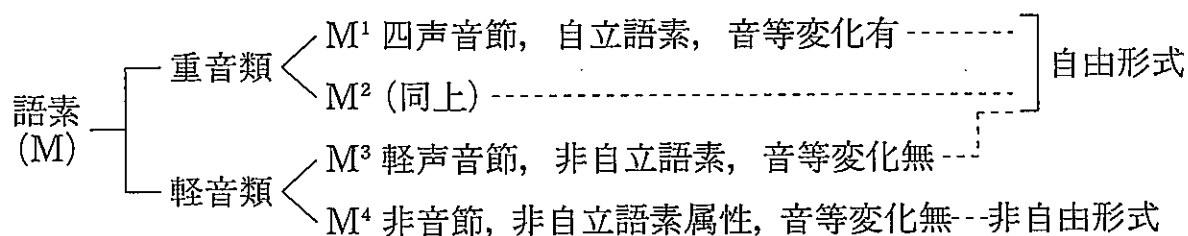
語素 M の類型：

- (1) 重音等音節語素 M<sup>1</sup>。例えば、  
 ˊ人, ˊ跑, ˊ吃, ˊ看, ˊ紅, ˊ一, ˊ去, ˊ来...
- (2) 次重音等音節語素 M<sup>2</sup>。例えば、  
 ˊ这, ˊ把, ˊ就, ˊ也, ˊ却, ˊ才, ˊ但, ˊ第<sup>(注8)</sup>...
- (3) 次軽音等軽音節語素 M<sup>3</sup>。例えば、  
 (a) ˊ了(le), ˊ的(de), ˊ過(gou), ˊ去(qu), ˊ来(lai), ˊ呢(ne), ˊ嗎(ma), ˊ吧(ba)。  
 (b) ˊ去(qu), ˊ来(lai), ˊ上(shang), ˊ下(xia), ˊ里(li), ˊ邊(bian), ˊ中(zhong), ˊ子(zi)。
- (4) 軽音等非音節語素属性 M<sup>4</sup>。例えば、  
 (a) ˊ了, ˊ的, ˊ過, ˊ得, ˊ地, ˊ着, ˊ去, ˊ来。  
 (b) ˊ儿, ˊ子, ˊ个, ˊ乎, ˊ巴, ˊ里, ˊ頭, ˊ們。

上例の中の次軽音等軽音節語素 M<sup>3</sup> の中の(a)は、文の構形形態となり、(b)は、構語形態の一つとなる。また、軽音等非音節語素属性 M<sup>4</sup> の中の(a)は、文における語の構形形態であり、(b)は、構語形態の一つである。第3・第4・節参照。

語素 M → M<sup>1</sup>, M<sup>2</sup>, M<sup>3</sup>, M<sup>4</sup> の形式特徴と関係は次のようになる。

図示2.



(注8) 「第」は接頭辞であるが、中国語においての語は前重型であって、すべての接頭辞が次重音等であることに注意すべきである。

以上を帰納すると、語素という文法的単位は重音類語素と軽音類語素とに大別される、その中では、重音類語素は語を構成する主要な要素で、軽音類語素は語を構成する補助的な「形態」のようなものである。軽音類語素は、構語形態（上掲 M<sup>3</sup> の(b), M<sup>4</sup> の(b)参照）と構形形態（上掲 M<sup>3</sup> の(a), M<sup>4</sup> の(a)参照）に分けられ、構形形態は、また、文の構形形態（上掲 M<sup>3</sup> の(a)参照）と文における語の構形形態（上掲 M<sup>4</sup> の(a)参照）に分けられる。

ところが、音声言語において、「語素の限界は言葉の内部要素によるのではなくて、外の言葉との比較の結果によって確定するものである」（Z. Harris, *Methods in Structural Linguistics*, p.163）。したがって、文において、語素は場合によって、語彙における語でありうる（下節例参照）。

### 3. 語とその類型

#### 3.1. 文においての語

音声言語における語(W)は語彙研究の対象としての語より、更に広範囲にわたる。例えば、辞典によって、「経理」は一つの語とされるが、文において、「<sup>1</sup>経理」は一つの語でもあり、別の複合語の一成分となることもある。例えば、

(8) <sup>1</sup>経理<sup>2</sup>不来（社長（責任者）は来ない）

(9) <sup>1</sup>営業部<sup>2</sup>経理<sup>3</sup>不来（営業部長（責任者）は来ない）

例(8)の中の「<sup>1</sup>経理」は語であるが、例(9)の中の「<sup>1</sup>営業部<sup>2</sup>経理」は複合語なので、その中の「<sup>1</sup>経理」は「<sup>1</sup>営業部」と同じ、語根語素であると認められる。以下の例(10), (11)の中の「<sup>1</sup>看得」も、自立語変体である語と複合語における語素との違いがある。例えば、

(10) <sup>1</sup>从这<sup>2</sup>儿<sup>3</sup>看<sup>4</sup>得<sup>5</sup>清楚<sup>6</sup>吧（こっちからはっきり見えるでしょう）

(11) <sup>1</sup>从这<sup>2</sup>儿<sup>3</sup>看<sup>4</sup>得<sup>5</sup>见<sup>6</sup>吧（こっちから見えるでしょう）

例(10)の中の「<sup>1</sup>看得」は自立語変体である語で、例(11)の中の「<sup>1</sup>看得」は「<sup>1</sup>看得<sup>2</sup>见」という複合語における語素の一部でしかない。

したがって、音声言語によって、文においての語 W を四種類：重音等自立

語  $W^1$ , 次重音等関係語  $W^2$ , 次軽音等助語  $W^3$ , 軽音等語助  $W^4$  のように分け、それらは、文法分析上で、また、自立語本体  $W^1$ , 自立語変体  $W^{1+4}$  ( $W^1+W^4 \rightarrow W^{1+4}$ ), 関係語  $W^2$  と文の構形形態とする助語  $W^3$  に分けられる。中国語の各種類型の文は、すべて四種類型の語 ( $W \rightarrow W^1, W^2, W^3, W^4$ ) によって構成されたものである。しかし、『語彙』の語を仮に  $W$  としても、それは  $W^1$  と  $W^2$  を表すのみであろう。

### 3.2. 語の類型とその形式特徴

語を音等によって、以下のように分けられる。

まず、重音類の構文単位と軽音類の構形単位を分ける。それで、構文単位を重音等である自立語  $W^1$  と次重音等の補助構文単位である関係語  $W^2$  に分け、構形単位を次軽音等の文の構形形態単位である「助語」 $W^3$  と、軽音等の語の構形形態単位である「語助」 $W^4$  に分ける。ここで言う構形単位には、例えば、「花。儿」, 「椅。子」, 「晚。上」, 「洗。洗」の中の「。儿」, 「。子」, 「。上」, 「。洗」などの構語形態は含まれていない。次節および第5.1.節参照。

語 $W$ の類型：

(1) 重音等自立語  $W^1$  (本体)。例えば、

山, 学校, 北京, 椅子, 代表团, 想, 干, 要, 看, 看得见, 站住, 进行, 考虑, 去, 来, 大, 红, 合适, 伟大, 热闹, 安静, 公司经理, 联合国, 大理石地板, 消防队员, 梅兰芳, 大学校长, 洗洗, 马马虎虎, 高高兴兴, 整理整理, 绿油油, 老张, 阿姨, 第一……

(2) 次重音等関係語  $W^2$ 。例えば、

他, 就, 更, 越, 可, 却, 很, 挺, 不, 这, 把, 为了, 朝, 从, 到, 该, 在, 有, 是, 虽然, 但是, 而且, 于是, 所以, 一件……

(3) 次軽音等助語  $W^3$ 。例えば、

.了, .的, .呢, .嗎, .吧, .過, .去, .来。

(4) 軽音等語助  $W^4$ 。例えば、

。了, 。着, 。過, 。的, 。得, 。地, 。去, 。来。

語  $W \rightarrow W^1, W^2, W^3, W^4$  は, 次の特徴をもつ。

(1) 重音等語  $W^1$

- a. 四声音節が構成した自立語 (複合語を含み) (本体)。
- b. 構文単位である自立形式。
- c. 文法単位である無限数の自由形式。
- d. 「前附加」と「転義」を除いて, すべて前重型である。
- e. 語内部に切れ目がない。

(2) 次重音等語  $W^2$

- a. 四声音節が構成した関係語。
- b. 補助構文単位である非自立形式。
- c. 文法単位である有限数の自由形式。(d, e, (1)と同じ)

(3) 次軽音等語  $W^3$

- a. 軽声音節である助語。
- b. 文の構形形態単位である非自立形式。
- c. 文法単位である有限数の非自由形式。

(4) 軽音等語  $W^4$

- a. 非音節である語助。
- b. 語の構形形態単位である非自立形式。
- c. 文法単位である有限数の附属形式。(この用語については別に詳論する)

この分類によって, 重音等自立語は, 名詞, 動詞, 形容詞を含み, 次重音等関係語は, 指示代名詞(人称代名詞を含む), 数量詞, 助動詞, 副詞, 介詞, 連詞を含むことになる。以上の分類のほか, 文における語は, また, 「表知」と「表情」とに分けられる。重音等の自立語の中では, 一部分の語は, 場合によって, 両方とも表現することができる。その表現の区別は音等上でも変化がある。しかし, 本文では論じない<sup>(注9)</sup>。

---

(注9) 高名凱 (1957) 『漢語語法論』 p.88参照。



## 4. 文中の自立語変体と助語

### 4.1. 語助と自立語変体

上述によって、自立語変体は自立語と構形形態である語助とが構成した文中の  $W^1+W^4 \rightarrow W^{1+4}$  のようなものを指す。

自立語  $W^1$  は変体  $W^{1+4}$  になる場合には、語助  $W^4$  の文法意味によって、意味が変わる。

上節にあげられた語助  $W^4$  がそれぞれ表われる文法意味は次の通り、四つのグループに分けられる。

- |       |                |       |                |
|-------|----------------|-------|----------------|
| (1) { | ① .了 (現時に相関)   | (2) { | ③ .的 (帰属範囲に相関) |
|       | ② .過 (過去に相関)   |       | ④ .得 (能動範囲に相関) |
| (3) { | ⑤ .着 (存続様態に相関) | (4) { | ⑦ .去 (趨遠方向に相関) |
|       | ⑥ .地 (情状様態に相関) |       | ⑧ .来 (趨近方向に相関) |

例えば、「吃」という重音等自立語は単独で文とする場合には、「吃！」(食べる!)、「吃？」(食べる?)、また、答える時も使える：「吃？」(食べる?)——「吃。」(食べる)。標点で示した意味を除けば、重音等自立語が、文中における意味は語彙における「吃」の意味と同じである。しかし、文において、それぞれ語助がつけられた場合には、その自立語変体の意味は語助によって変わる。

以下にはそれぞれ語助を含む自立語変体の例をあげて見よう。

- (1) ~.了, ~.過。例えば,
- (12) 吃.了飯再去 (食事してから行く)
- (13) 那本书已经看.了三天.了 (あの本は読み始めてもう三日間にもなる)
- (14) 吃.過飯就去.了 (食事してからすぐ行った)
- (15) 那本书已经看.過三遍.了 (あの本はもう三度も読んだ)

例(12)~(15)の中の「吃.了」,「看.了」,「吃.過」,「看.過」は文中でいずれも

自立語変体  $W^{1+4}$  となっている。「了」と「過」はそれぞれ第(1)グループの現時、過去に相関する文法意味を表す。例に見られたように、例(12)の中の「吃。了」は、「吃」という行為をるところ（或いはその動作する時間に近づいた時）であった「了」の現時に或いはその時に相関する意味が含まれている（注：自立語変体は「ある“時”に相関する」意味を表すのみの場合にも、テンスとならない）。同じように、例(13)の中の「看。了」は、その動作を始めるその時に相関するという意味を表すことである。「看。了」と「三天了」がともに、動作と発話の間の「時序」を表し、例(13)のような文は、「現在完成時」（テンス）を表す文とすることができる。例(14)の中の「吃。過」は、「吃」という行為をすることが、過去に相関するという意味を表すことである。それによって、「吃。過飯就去了」のような文は、「過去完成時」を表す文とすることができる（現在、過去完成時を表す文は自立語変体に「了」、「過」を含み、しかも、文の構形形態「了」（完成或いは実現という文法意味を表す）という助語がある場合に生じるものである）。

例(15) の中の「看。過」も過去に相関する意味を表す。したがって、(15)の中の「三天」を(16)のように、「三天」に直すことはできない。

(15) 那本<sub>1</sub>書<sub>1</sub>已經<sub>1</sub>看<sub>1</sub>過<sub>1</sub>三<sub>1</sub>遍<sub>1</sub>了<sub>1</sub>（過去時間に相関）

(16)\* 那本<sub>1</sub>書<sub>1</sub>已經<sub>1</sub>看<sub>1</sub>過<sub>1</sub>三<sub>1</sub>天<sub>1</sub>了<sub>1</sub>

例(15)は自立語変体「看。過」と、完成或いは実現という文法意味を表す助語「了」とがあるので、過去完成時の文となるが、(16)は間違った文である。それは、過去に相関する意味を表す自立語変体  $W^{1+4}$  は、発話時までの時段を同時に表現することができないからである。したがって、(16)は  $W^4$  を「了」にすることは可能である（例(13)のように）。しかし、(15)でも、 $W^4$  を「了」に直すことができる。

(17) 那本<sub>1</sub>書<sub>1</sub>已經<sub>1</sub>看<sub>1</sub>了<sub>1</sub>三<sub>1</sub>遍<sub>1</sub>了<sub>1</sub>（あの本はもう読んで三遍にもなる）

そうすれば、現在完成時の文になるのである。

(2) ～的, ～得。例えば,

(18) 吃<sub>1</sub>的<sub>1</sub>多<sub>1</sub>極<sub>1</sub>了<sub>1</sub>（食べものは沢山ある）

(19) 写<sub>1</sub>的<sub>1</sub>有<sub>1</sub>道<sub>1</sub>理<sub>1</sub>（書かれたことは筋が通っている）

(20) 吃。得。多。極。了 (いっぱい食べられる)

(21) 写。得。有。道。理 (筋が通るように書ける)

例(18)~(21)の中の「吃。的」, 「写。的」, 「吃。得」, 「写。得」は文中でいずれも自立語変体  $W^{1+4}$  となっている。その中の「。的」と「。得」はそれぞれ第(2)グループの帰属範囲, 能動範囲に相関する文法意味を表す。例(18)の中の自立語変体「吃。的」は, 食べられるものの帰属範囲に相関する意味を表すので, 次の(22)は成立, (23)は成立しないものである。

(22) 那。儿。吃。的。多。極。了 (あそこに, 食べものは沢山ある)

(23)\* 他。吃。的。多。極。了 (≠: 彼のところは食べものが沢山ある)<sup>(注10)</sup>

例(23)の音等配列は変えずに, その日本語訳のような意味を表すならば, 次のように直さなければならない。即ち, 帰属範囲を表明すること。

(24) 他。那。儿。吃。的。多。極。了 (彼のところは食べものが沢山ある)

例(19)の中の自立語変体「写。的」は書かれたものの帰属範囲に相関する意味を表すので, 次の(25)は成立し, (26)も成立する。

(25) 这。篇。文。章。写。的。有。道。理 (この文章が書いたことは筋が通っている)

(26) 他。写。的。有。道。理 (彼は書くものに筋が通っている) (=彼は常に筋の通る文章を書く)

注目したいのは, (26)の中の「他」は次重音等の「他」(代名詞は次重音等指代関係語に属するものである)から変わったもので, その「他」は文における主題である(「他」の後に「途切れ」がある)。したがって, 例(27)のように「他」を「他」にかえたら, 文の意味が変わるので, 中の語助  $W^4$ 「。的」は「。得」にならなければならない。(28)のようになる。しかも, 「他」の後に途切れはない(切れ目がある)。

(27)\* 他。写。的。有。道。理

(28) 他。写。得。有。道。理 (彼は筋の通った文章が書ける)

例(28)の中の「他」は主語で, 主題ではない。そこで, 同じ考えかたで, 例(23)のような音等配列の場合に, その中の語助  $W^4$  を「。得」に直せば, 次の

(注10) 「≠」は日本語訳が中国語原文と一致しないを示す。

(29)のような正しい文になる (『多極了→多極了』)。(本文の例(89)と(93)参照)

(29) 他吃得多極了 (彼がいっぱい食べられる)

例(28), (29)の中の語助 W<sup>4</sup>「.得」と例(20), (21)の中の語助 W<sup>4</sup>「.得」は同じように、能動範囲に相関する文法意味を表す。(23)の中の「他」を「他」(主題)に改めたら、(30)のような正しい文になる。

(30) 他吃的多極了 (彼は食べものが沢山ある)

例(20), (29)の中の自立語変体「吃.得」は食べるの能動範囲に相関する意味を表すので、その後に、能動の程度を表す語、或いは詞組などが必ずある。その音等配列も「.的」を含む帰属範囲に相関することを表すものと異なる。勿論、ここで言うルールは(21), (28)にも適用される。(21), (28)の中の自立語変体「写.得」は書くの能動範囲に相関する意味を表す、その後に能動の程度を表すものがある。

ここで提起したいのは、上述のほか、複合語の語素成分としての「～.得」もある。例(11)の中の「看.得見」にある「看.得」と「見」はその複合語を構成する語素である。以下あげたものは皆複合語であり、文成文として、分割することはできない。しかも、音声言語の考察によって、それらの内部には、切れ目もないし、音等配列も普通の二音節の複合語と同じように、前は重音等、後は次重音等(軽声字を除く)である。自立語変体 W<sup>1+4</sup>と違って、文法分析する場合には、混同することは許されない。

(31) 看.得見, (32) 吃.得了(liǎo), (33) 想.得開, (34) 買.得起,  
(35) 搬.得動, (36) 划.得来, (37) 听.得懂, (38) 說.得圓。

(3) ～.着, ～.地。例えば,

(39) 黑板上写着一些字 (黑板の上に、幾つか字が書いてある)

(40) 湖面上游着一只天鵝 (湖に、白鳥が泳いでいるのだ)

(41) …他担心地说 (彼は心配そうに言った)

(42) 輕々地哼着搖籃曲 (そっと子守歌をはなうたで歌う)

例(39)~(42)の中の「写.着」, 「游.着」, 「担心.地」, 「輕々.地」は文中でいずれも自立語変体 W<sup>1+4</sup>として存在し、その中の「.着」と「.地」はそれぞれ第(3)グループの存続様態、情状様態に相関する文法意味を表す。例(39)の中の自

立語変体「<sup>1</sup>写.着」は、書きものの存続様態に相関する意味を表し、(40)の中の自立語変体「<sup>1</sup>游.着」は、湖にいる存続様態に相関する意味を表すので、一般に、後に存続様態を表す指定されたもの(定指、或いは定量の事物)がある。例えば、(39)の「<sup>1</sup>一.些'字」、(40)の「<sup>1</sup>一.只'天'鵝」、(42)の「<sup>1</sup>摇'籃'曲」は、それぞれはその中の存続様態に指定されたものである。

例(41)の中の自立語変体「<sup>1</sup>担'心.地」は、心配する情状様態に相関する意味を表し、(42)の中の自立語変体「<sup>1</sup>軽'々.地」は、軽い情状様態に相関する意味を表すので、後に、自立語としての動詞本体或いは変体を含む語と詞組などが存在する。例えば、(41)においては、修飾されたのは動詞本体「<sup>1</sup>説」で、(42)においては、修飾されたのは動詞変体(存続様態を表す  $W^{1+4}$ )「<sup>1</sup>哼.着」ということである。

(4) ~.去, ~.来。例えば,

(43) '你'不'能'寄'錢.去'讓'他'自'己'買.嗎 (君はお金を届けて、彼に自分で買わせられないのか)

(44) '那'錢'拿.去'買'油'条.来 (その金は持って、油条を買ってこい)

(45) '你'不'能'寄'錢.来'讓'他'自'己'買.嗎 (君はお金を届けて、彼に自分で買わせられないのか)

(46) '那'錢'拿.来'買'油'条.去 (その金は持って、油条を買いに行こう)

例(43)~(46)の中の「<sup>1</sup>寄'錢.去」、<sup>1</sup>「<sup>1</sup>拿.去」、<sup>1</sup>「<sup>1</sup>寄'錢.来」、<sup>1</sup>「<sup>1</sup>拿.来」は、文中でいずれも自立語変体  $W^{1+4}$  で、その中の「.去」と「.来」は、それぞれ第(4)グループの趨遠方向、趨近方向に相関する文法意味を表す。例(43)の「<sup>1</sup>寄'錢.去」と例(45)の「<sup>1</sup>寄'錢.来」は複合自立語変体であり、例(44)の「<sup>1</sup>拿.去」と例(46)の「<sup>1</sup>拿.来」は単純自立語変体である。例(44)と(46)文末の「.来」と「.去」は次軽音等の文の構形形態である助語、ここで言う自立語変体を構成する語助と違う。次節に述べる。(筆者は1995. a, bに「去」と「来」が文においては、四種類の音等差別があるものと言ったが、軽音類については(例文とも)本文に準じる)。

現在までのところ、一般に「去」と「来」を重音と軽音のように二種類に分けて、音声言語の考察、分析を進めることは十分に行なわれてこなかった。その認識は極めて不十分であったと思う。

## 4.2. 助語とその文法意味

語助  $W^4$  と異って、助語  $W^3$  は、ある意図を表明し、文を構成する形態のよ  
うなものである。

上節にあげられた助語  $W^3$  の文法意味は次の通り、二つのグループに分け  
られる。それぞれは「表知」（認知を表す）と「表情」（情態を表す）のよう  
に分ける。（ $W^3$  についての解説は、紙幅の制限により、他文にゆずる。）

## (1) 「表知」の助語

- ①.了（完成 実現）
- ②.過（経歴 経験）
- ③.呢（持続 状況）
- ④.的（認定 従属）

## (2) 「表情」の助語

- ⑤.嗎（詢問 反衬）
- ⑥.吧（推量 勧誘）
- ⑦.去（行方 意向）
- ⑧.来（返方 意向）

以下に、それぞれについての例をあげて見よう。

(1)客観に対する「表知」の助語。例えば、

①.了（完成 実現）。例えば、

(47)吃<sub>1</sub>三碗<sub>1</sub>飯.了（ご飯を三ばい食べた）

(48)下<sub>1</sub>雨.了（雨が降った）

(49)别<sub>1</sub>說.了（もう言わないで）

(50)大<sub>1</sub>学<sub>1</sub>生.了（もう大学生になった）

②.過（経歴 経験）

(51)教.過<sub>1</sub>幾<sub>1</sub>年<sub>1</sub>書（何年間か教えたことがある）

(52)小<sub>1</sub>时<sub>1</sub>.候<sub>1</sub>曾<sub>1</sub>想.過<sub>1</sub>作<sub>1</sub>医<sub>1</sub>生（子供の頃、かつて医者になりたいと考えたこと  
がある）

(53)孫<sub>1</sub>中<sub>1</sub>山<sub>1</sub>先<sub>1</sub>生<sub>1</sub>.在<sub>1</sub>上<sub>1</sub>海<sub>1</sub>從<sub>1</sub>事.過<sub>1</sub>重<sub>1</sub>要<sub>1</sub>.的<sub>1</sub>革<sub>1</sub>命<sub>1</sub>活<sub>1</sub>動（孫中山先生は上海で  
重要な革命活動に従事したことがある）

(54)他<sub>1</sub>去.過<sub>1</sub>北<sub>1</sub>京（彼は北京に行ったことがある）

③.呢（持続 状況）。例えば、

(55)他<sub>1</sub>在<sub>1</sub>里<sub>1</sub>屋.呢（彼が奥の部屋にいる）

(56)他<sub>1</sub>写<sub>1</sub>字.呢（彼が字を書いている）

(57) 怎|麼|能|搬|得|走|兩|座|大|山|囑 (どうして二つの大きな山を運んでいく  
ことができようか)

(58) 四|鳳|呢 (四鳳は)

④. 的 (認定 従属)。例えば,

(59) 咬|死|了|獵|人|的|狗 (獵人を咬んで死せた犬)

(60) 我|去|的|是|有|山|有|水, |風|光|明|媚|的|地|方 (私が行ったのは山もあり,  
水もあり, 風光明媚の所であった)

(61) 聞|一|多|的|書 (聞一多が書かれた本だ)<sup>(注11)</sup>

(62) 魯|鎮|的|酒|店|的|格|局 (魯鎮の酒屋に特有な構え)

(2) 主観から「表情」の助語。例えば,

⑤. 嗎 (詢問 反衬)。例えば,

(63) 你|要|去|嗎 (君は行きたいですか)

(64) 你|不|去|嗎 (君は行かないですか) (43), (45)参照)

⑥. 吧 (推量 勧誘) 例えば,

(65) 他|不|知|道|吧 (彼は知らないでしょう)

(66) 一|起|去|吧 (一緒に行きましょう)

⑦. 去 (行方 意向)。例えば,

(67) 我|買|菜|去 (私は野菜を買いに行こう)

(68) 你|不|求|劉|經|理|求|誰|去 (君は劉經理に頼まず誰に頼もうとするのか)

⑧. 来 (返方 意向)。例えば,

(69) 我|買|菜|来 (私が野菜を買ってこよう)

(70) 这|錢|拿|去|買|油|条|来 (この金を持って油条を買ってこい)

助語 w<sup>3</sup>としての構形形態の文法特徴は、文中におけるある語の一部分となるものではなくて、文に認知、情態の意味を加え表すもので、文に属する構形形態のようなものである。

(注11) 「聞一|多|的|書」の意味は「聞一多の(所有している)本」である。音等の異なるによって、意味も機能も異なる。

## 5. 構文単位としての語の構造

### 5.1. 重音等語の構造

ここでは、重音等自立語という構文単位の構造を次の四種類に分類した。

①内部屈折、(2)重音転移、(3)附加語綴、(4)複合語。それぞれ構文単位としての語構造は音声言語において、音等配列もはっきり異っている。

#### ①内部屈折

内部屈折とは、音節内部の声調、音等など非音質的な変化と音節の後子音(子音<sup>2</sup>(C<sup>2</sup>))の変化を示す。

##### (a)音節内部の声調、音等などの変化

音声言語において、音質的成分が同じで、しかも同一漢字で表記する音節の語は、非音質的成分—声調、音等が変化を示す。例えば、「大意」(dàyi) (概要)は二つの四声音節で構成する語であるが、「意」が次軽音等になると、「大意」(dàyi) (不注意)となり、四声音節と軽声音節とで構成する語になる。

##### (b)音節内部の後子音<sup>2</sup>(C<sup>2</sup>)変化

音節の音質的成分が変化し、その変化した部分を漢字で記入する場合を指す。例えば、前にあげた「花儿」(huār)は「花」(huā)という語の音節内部の音質的成分が変化したものである。以下の例を比べてみよう。

	拼音符号	国際音標	
1. {	花(錢)	huā	[ xwa <sup>21</sup> ]
	花儿	huār	[ xwa <sup>21</sup> ]
2. {	椅(墊)	yǐ	[ ji <sup>21</sup> ]
	椅子	yǐ·zi	[ ji <sup>21</sup> ]
3. {	尾(部)	wěi	[ wei <sup>21</sup> ]
	尾巴	wěi·ba	[ wei <sup>21</sup> ]



4.	{	石(碑)	shí	[	ʂ	ɿ̄	]
		石.頭	shí·tou	[	ʂ	ɿ̄	]

上例の中の軽音等に属する「.儿」, 「.子」, 「.巴」, 「.頭」など(第2.2.節語素の類型参照)はその音節内部屈折を表す語素属性である構語形態である。文における語の構形形態と異なる。語の構形形態は語助で、自立語につけると、自立語変体になる。自立語の音節内部屈折と見なせるが、同じ語の変体を構成し、二つの語にはならない。例えば、「花」と「花.儿」は二つの語であるが、「吃」と「吃.了」は同一語の本体と変体である。「.儿」と「.了」は両方とも語素属性といえるが、語助とは語の構形形態をしか示さない。

## (2)重音転移

重音転移とは文における構文単位とする重音等自立語と次重音等関係語が、場合によって、音等を転移することを指す。

### (a)重音等自立語の重音転移

文において、重音等自立語は文成分の修飾語(定, 状, 補語成分)となる場合には、次重音等に転移することが生じるが、依然として、重音等語に属する。例えば、本文であげた例(1)「咬死.了獵人.的狗」の実際音等は、「死.了」と「狗」が「咬」と「獵人.的」より重い、「咬」と「獵人.的」は「死.了」と「狗」に相対して言えば、次重音等となるが、やはり重音等語に属する。したがって、実は、重音等自立語の重音転移は、文における中心語成分と非中心語成分を音等で表している。(これについては今後再論する必要があると考える。)

### (b)次重音等関係語の重音転移

次重音等関係語は文中では、場合によって重音転移することもあるが、依然として、次重音等語に属する。例えば、人称代名詞は次重音等語であるが、文の中では、主題となる場合には、重音等になる。例(5)参照。

上述のほか、対比文において、強調する語は対比重音に転移する。大部分の重音等自立語或いは次重音等関係語は文中で対比重音になることがありうる。

文における、重音転移は文成分を区別する音等配列の形式である。

一つの実例をあげて見よう。例えば、次の例、「走過这座小橋」を実際の音声言語における音等をつけて分析すれば、以下の(71), (72)のように分けられる。

(71) 走<sup>1</sup>過<sup>1</sup>这<sup>1</sup>.座<sup>1</sup>小<sup>1</sup>橋 (この小橋を歩いて渡る)

(72) 走.過<sup>1</sup>这<sup>1</sup>.座<sup>1</sup>小<sup>1</sup>橋 (この小橋を渡ったことがある)

例(71)において、重音等自立語「走」と「過」は一つの単語連結(詞組)を構成し、「走」は「過」に対して、次重音等になり、通過の方式を表している。したがって、例(71)の中では「過」は全文に主要動詞であるべき。例(72)において、「過」は次軽音等の構文形態とする助語なので、例(72)の場合に、「走」は主要動詞である。日本語訳に見られたように、例(71)と例(72)における「走過」と「走.過」の意味は異なる。

しかし、今まで多くの学者達はそのようなものをすべて「補語」として説明している。これは極めて不十分な考え方である。それに関する詳しい討論は別の文にゆずる。

### (3) 附加語綴

もし、上述の通りに、「重音転移」を文における語と語の間関係によって生じるものと考えれば、「附加語綴」とは、文における語の構成形式の一つである。

附加語綴というのは、二つ音節以上の自立語の中の附加成分を指す。

附加語綴は「重迭」、「詞頭」、「詞尾」、「中嵌」を含む。ここでは、附加語綴を「加綴」と「重迭」のように二種類に分けて、更に、「加綴」を「前綴」、「中綴」、「後綴」のように三種類に分け、「重迭」を「単音節語素の重迭」と「複音節語素の重迭」に二種類に分ける。

(1) 加綴 ( \_ の語素は附加語綴を示す)

① 前綴。音等配列：□<sup>1</sup>□，□<sup>1</sup>.□□，□<sup>1</sup>.□.□□。

(a) 序数。例えば，老<sup>1</sup>二，第<sup>1</sup>一，初<sup>1</sup>三，

(b) 「称呼語」。例えば，老<sup>1</sup>張，小<sup>1</sup>王，阿<sup>1</sup>姨，

(c) 形容詞。例えば，可<sup>1</sup>笑，可<sup>1</sup>能，好<sup>1</sup>看，難<sup>1</sup>吃，滴<sup>1</sup>.溜<sup>1</sup>圓，稀<sup>1</sup>.巴<sup>1</sup>爛，

稀<sup>1</sup>.里<sup>1</sup>糊<sup>1</sup>塗，吊<sup>1</sup>.儿<sup>1</sup>郎<sup>1</sup>当。

②中綴。音等配列：'□.□□，'□.□.□□。

(a)迭音綴。例えば，'孤.零零，'冷.冰冰，

(b)重複綴。例えば，'大.大.方方，'馬.馬.虎虎，'熱.熱.鬧鬧。

③後綴。音等配列：'□.□，'□.□.□，'□.□.□.□。

(a)指人の「.子」：例えば，'妻.子，'儿.子，'孫.子，'騙.子，'厨.子，'鬼.子，

(b)方位，範囲を表す「.上，.下，.里，.中，.邊」など，例えば，'椅.子.上，

'院.子.里，'世界.上，'進行.中，'情理.上，'指導.下，'前.邊，

(c)趨向を表す「.去」，「.来」。例えば，'壞.下.去，'拿.出.去，'看.上.去，'想起

.来，'坐.過.去，'紅.起.来，

(d)重迭綴。例えば，'綠.油.油，'厚.敦.敦，'慢.悠.悠，

(e).不/.里/.了を含む後綴。例えば，'湿.不.濟.濟，'花.里.胡.梢，'粘.了.吧.噁

(2)重迭（\_の語素は重され語綴を示す）

①単音節語素の重迭。

(a)延音型。音等配列：'□.□。

②親族称呼。例えば，'媽.媽，'姐.姐，'叔.叔，

③兒童用語。例えば，'飯.飯，'管.管，'虫.虫，'毛.毛，

④「小名」。例えば，'芳.芳，'蘭.蘭，'龍.龍，'虎.虎，

⑤其他。例えば，'娃.娃，'痒.痒。

(b)構語型。音等配列：'□.□，'□□。

⑥重音等に属する'□.□型。例えば，'說.說，'想.想，'算.算，'洗.洗，

⑦次重音等に属する'□□型。例えば，'人.人，'个.个，'家.家，'年.年，'常.常，

'偏.偏，'静.静，'輕.輕。

②複音節語素の重迭。

(a)一重重迭

③後綴式重迭。音等配列：'□.□□□。例えば，'整.理.整.理，'清.静.清.静，

'比.試.比.試，'見.識.見.識，

④中綴式重迭。音等配列：'□.□□，'□.□.□□。例えば，'蔭.森.森，'馬

.馬.虎.虎。（加綴の「中綴」参照）

(b)二重重迭（重迭の複合）

㉑後綴重迭。音等配列：□□□□。例えば、説説笑笑、洗洗涮涮、緩緩慢慢、

㉒前綴重迭。音等配列：□□□□。例えば、家家戶戶、年年月月、平平常常。

#### (4)複合語

複合語は二音節以上の重音等詞根語素を含み構成したもので、文の中では、一つの概念意味を表すものである。

前述のように、複合語の音等配列は前重型である（前綴と意味変化の場合を除く）、音等配列は、一般に、前は重音等、後は次重音等（後綴を除く）、中間の音節は各種の音等になる可能性がある。例えば、

1. 二音節の複合語（□□、□.□□）：①并列関係：大小、森林、運動、②規定関係：紅花、外套、新年、③引導関係：炒飯、解散、看得見。
2. 三音節の複合語（□□□）：④複綜式：紅綠灯、少年宮。
3. 四音節以上の複合語（成語など）：小題大做、心心相印、大理石地板。
4. 緊縮式：北大、人大、聯合國。

文において、複合語は比較的自由に結合することができる語であり、辞典にある複合語よりはるかに多い。音声言語における音等で区分してこそ、正確に区分することができる。

## 5.2. 次重音等語の特質

次重音等語は補助的構文単位として、大多数の場合には、単にそれを用いて構文することはない<sup>(注12)</sup>。普通に見られているのは、次重音等語は常に、重音等語の前、或いは後に用い、その重音等語との相関関係を表す。

(注12) 上下文により、或いはコミュニケーションの場合には、次重音等語に属する語だけでも文を構成することができる。例えば、「可是」だけで、文とは言えないが、日常会話では、場合によって、「…可.是…」のような言葉でも、意味を伝達する間に、ある意味を完全に表し、聴手にも通じる。そのようなものは「未完成文」である。本文第6.1節参照。

次重音等語は重音等語の前におかれ、重音等語との各種関係をする。それらは四種類に分けられる。

- (1)助動関係 (助動詞／動詞),
- (2)前置関係 (前置詞／名詞),
- (3)修飾関係 (副詞<代, 数, 量>／名詞<動, 形>),
- (4)接続関係 (接続副詞／名詞<動, 形>)。

次重音等語は重音等語と単語連結を構成する。次の例の\_\_\_\_の部分単語連結である。

- (1)助動関係 (助動詞／動詞)。例えば,
  - (73)想<sub>1</sub>回<sub>1</sub>家 (帰りたい) <sup>(13)</sup>
  - (74)可<sub>1</sub>以<sub>1</sub>吸<sub>1</sub>煙<sub>1</sub>嗎 (煙草を吸ってもかまいませんか)
- (2)前置関係 (前置詞／名詞)。例えば,
  - (75)把<sub>1</sub>書<sub>1</sub>拿<sub>1</sub>来 (本を持ってこい)
  - (76)給<sub>1</sub>他<sub>1</sub>教<sub>1</sub>鋼<sub>1</sub>琴 (彼にピアノを教える)
  - (77)我<sub>1</sub>是<sub>1</sub>学<sub>1</sub>生 (私は学生です)
  - (78)生<sub>1</sub>在<sub>1</sub>北<sub>1</sub>京 (北京に生れた)
  - (79)她<sub>1</sub>比<sub>1</sub>妹<sub>1</sub>妹<sub>1</sub>高<sub>1</sub>一<sub>1</sub>点<sub>1</sub>儿 (彼女は妹より少し高い)
  - (80)水<sub>1</sub>从<sub>1</sub>山<sub>1</sub>上<sub>1</sub>流<sub>1</sub>下<sub>1</sub>来 (水は山から流れてくる)
- (3)修飾関係 (副詞<代, 数, 量>／名詞<動, 形>)。例えば,
  - (81)她<sub>1</sub>很<sub>1</sub>美 (彼女は美しい)
  - (82)慢<sub>1</sub>慢<sub>1</sub>走 (ゆっくり歩く)
  - (88)一<sub>1</sub>件<sub>1</sub>小<sub>1</sub>事 (一つの小さい事)
  - (84)家<sub>1</sub>家<sub>1</sub>掛<sub>1</sub>紅<sub>1</sub>灯 (各家に紅灯を掛ける)
- (4)接続関係 (接続副詞／名詞<動, 形>)。例えば,
  - (85)一<sub>1</sub>回<sub>1</sub>家 就<sub>1</sub>吃<sub>1</sub>飯 (家に帰えると食事する)

上述のほか、分文の間に接続関係を表す「連詞」は、ここでは四種類の中

(注13) 例(73), (74), (85)の中の「<sub>1</sub>回<sub>1</sub>家」, 「<sub>1</sub>吸<sub>1</sub>煙」, 「<sub>1</sub>吃<sub>1</sub>飯」は「引導関係」の複合語である。

には入れない。

次重音等語を重音等語の後に用いるものとしては、主として、数量詞、代詞、また幾つかの副詞がある。それらは重音等語と複合語のような音等配列を構成する。例えば、

(86) 去<sub>1</sub>哪<sub>1</sub>儿 (どこに行く)      (87) 找<sub>1</sub>他<sub>1</sub> (彼を探す)

(88) 敲<sub>1</sub>三<sub>1</sub>下<sub>1</sub> (三回叩く)      (89) 多<sub>1</sub>極<sub>1</sub>了<sub>1</sub> (沢山ある)

文において、このように構成されたものは、切れ目もないし、いつも重音等語について働くので、それらを文中で臨時に構成された「引導関係」の複合語と認めよう。しかし、上例の(86)~(89)の音等配列を変えると、二つの語の組み合わせ、詞組あるいは単語連結になる。次の通り。

(90) 去<sub>1</sub>哪<sub>1</sub>儿 (行くのはどこ?),      (91) 找<sub>1</sub>他<sub>1</sub> (探すのは彼だ),

(92) 敲<sub>1</sub>三<sub>1</sub>下<sub>1</sub> (叩くのは三回だけ),      (93) 多<sub>1</sub>極<sub>1</sub>了<sub>1</sub> (極めて多い)<sup>(注14)</sup>。

音等によるこの分類は、二つの対立する関係を形成する：(1)次重音等語は重音等語の前に立ち、重音等語とのある種の間接関係を表す。重音等語と組み合わせて単語連結を構成する。(2)次重音等語は、重音等語の後に用いる場合には、語素となり、重音等の語素と複合語を構成するのがあり、語として、重音等語と組み合わせて詞組を構成するのもありうる。

## 6. まとめ

### 6.1. 文法的単位

上述の語元素 (m), 語素 (M), 語 (W) の上に、詞組 (P) という単位がある。詞組の音等特徴は語と対立する。語の音等特徴は前重型で、詞組(単語連結を含む)のは前次重型である。

ここで例をあげて比べて見よう。例えば、「炒飯」<sup>(注15)</sup>が文において、「炒飯」

(注14) 「多極了」はまた「多くてたまらない」という強い意味を表しうる。

(注15) 趙元任氏(1968)は「炒飯」、また下の「開水」について、複合語と詞組の区別を認めていない。

と「炒飯」があり、前者は複合語で、後者は詞組である。音等が異なり、内部の切れ目のあるなしも異なる。次の例を見よう。

(94) 我<sup>1</sup>要<sup>1</sup>炒<sup>1</sup>飯<sup>1</sup>.去 (私がチャーハンを頼みに行く)

(95) 我<sup>1</sup>要<sup>1</sup>炒<sup>1</sup>飯<sup>1</sup>.去 (私はチャーハンを作りに行こう)

(96) 開<sup>1</sup>水<sup>1</sup>来<sup>1</sup>.了 (湯が来た)

(97) 開<sup>1</sup>水<sup>1</sup>来<sup>1</sup>.了 (水を出しに来た)

上述のように、例(94)の中の「炒飯」と(96)の中の「開水」は複合語であるが、例(95)の中の「炒飯」と(97)の中の「開水」は詞組で、語の組み合わせである。

次重音等語と重音等語が構成した「単語連結」は詞組の一類と見なされる。第5.2節例参照。

かくして、二つ以上の構文単位——語の組み合わせを詞組と呼べば、文の構形単位を含む語の組み合わせは、詞組より更に大きな文法的単位——詞組群(Ps)と見なされる。例えば、例(94)~(97)はすべて詞組群と言える<sup>(注16)</sup>。

文法分析の最も大きな単位は文である。それは、語以上のものおよびそれらの組み合わせによって、なんらかの考えを表す、一定の文法特徴をもつ、最も基本的な言語単位である<sup>(注17)</sup>。その定義に符合するものであれば、すべて文となる。その意味上で、文を形式によって、完成文(S<sub>1</sub>)と未完成文(S<sub>2</sub>)とに分けられる。

そうすると、中国語の文法的単位は、音声言語によって、語元素(m)、語素(M)、語(W) (複合語を含む)、詞組(P) (単語連結を含む)、詞組群(Ps)、そして文(S)、と分けられる。

(注16) レベル高い構造は低い構造を含む。例えば、詞組群では、詞組、語を含む。詞組では語を含む。語では語素を含む、語素では語元素を含む。筆者「句法語音結構導論」3.1節参照。

(注17) 高名凱氏(1963)は、文が「表達完整思想的具有一定語法特徵的、最基本的言語單位」と言ったが、筆者はその定義は意味を表す面から限定したが、その構造(文)を構成する面から限定しなかった。不十分と思ったので、高氏の定義の前に、文を構成する単位と、それら構造単位が文との関係を加えて、文の定義とした。

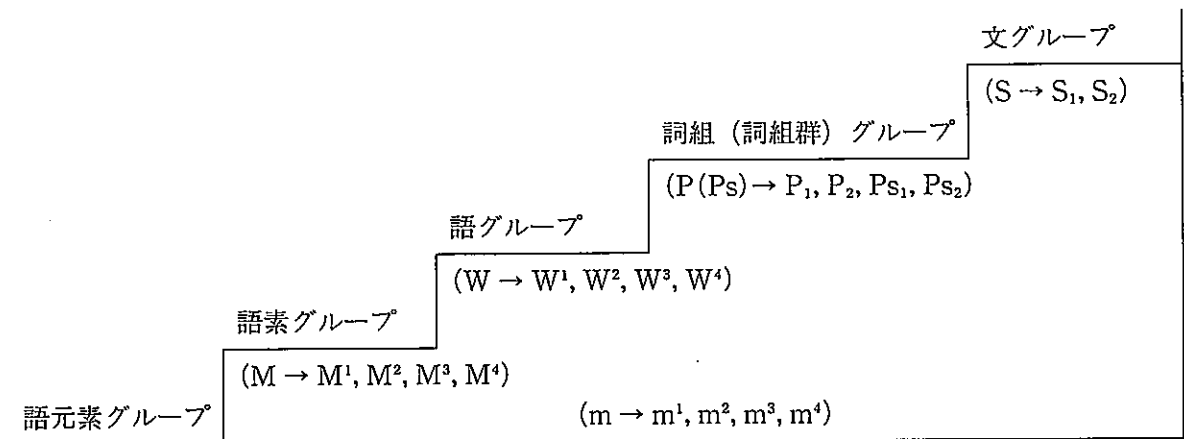
6.2. 文法的単位のグループとそのグレイド

文において、文法的単位はそれぞれグループ<sup>(注18)</sup>となっている。

- 語元素  $m$  : (1)四声音節語元素,  $m^1$ , (2)軽声音節語元素,  $m^2$ ,  
 (3)非音節的語元素,  $m^3$ , (4)非音質的超語元素,  $m^4$ 。  
 語素  $M$  : (1)重音等音節語素,  $M^1$ , (2)次重音等音節語素,  $M^2$ ,  
 (3)次軽音等軽音節語素,  $M^3$ , (4)軽音等非音節語素属性,  $M^4$ 。  
 語  $W$  : (1)重音等自立語,  $W^1$ , (2)次重音等関係語,  $W^2$ ,  
 (3)次軽音等助語,  $W^3$ , (4)軽音等語助,  $W^4$ 。  
 詞組  $P$  : (1)重音等単語の組み合わせ,  $P_1$ ,  
 (2)次重音等と重音等の単語連結,  $P_2$ 。  
 詞組群  $Ps$  : (1)構形単位を含む語の組み合わせ,  $Ps_1$ ,  
 (2)語以上構文単位の組み合わせ,  $Ps_2$ 。  
 文  $S$  : (1)完成文,  $S_1$ , (2)未完成文,  $S_2$ 。

これらグループは構造において、四つのグレイド：語素グループ、語グループ、詞組（詞組群）グループ、そして文グループとなり、その基礎は、語元素グループである。以下の図示の通り（上記符号参照）。

図示3. 文法的単位のグループとそのグレイド：



(注18) ここで言う「グループ」は Z. Harris が『Structural Linguistics』に言った形式類 (form kind) と完全に同じではない。



## 参考文献要目

- F. De. Saussure (1916) 『普通語言学教程』高名凱訳，北京：商務印書館（1980）  
 N. Chomsky (1957) 『句法結構』邢公畹等訳，北京：中国社会科学出版社（1979）  
 L. Bloomfield (1933) 『語言論』袁家驊等訳，北京：商務印書館（1980）  
 馮志偉編（1987）『現代語言学流派』，陝西人民出版社（1987）  
 高名凱（1957）『漢語語法論』，北京：科学出版社（1957）  
 高名凱等（1963）『語言学概論』，北京：中華書局（1981）  
 趙元任（1951）『北京口語語法』李容訳，北京：中国青年出版社（1952）  
 趙元任（1968）『A GRAMMAR OF SPOKEN CHINESE』台湾：敦煌書局有限公司  
     中訳本：『漢語口語語法』呂叔湘訳，北京：商務印書館（1979）  
     『中国話的文法』丁邦新訳，香港：香港中文大学（1980）  
 徐世榮（1980）『普通話語音知識』，北京：文字改革出版社（1980）  
 周法高（1970）『中国語文研究』，京都：中文出版社（1970）  
 朱德熙（1980）『現代漢語語法研究』，北京：商務印書館（1980）  
 朱德熙（1982）『語法分析』，北京：商務印書館（1982）  
 朱德熙（1984）『語法講義』，北京：商務印書館（1984）  
 呂叔湘（1979）『漢語語法分析問題』，北京：商務印書館（1979）  
 市河三喜，服部四郎（1955）『世界言語概説』，東京：研究社（1955）  
 服部四郎：『言語学の方法』，東京：岩波書店（1960）  
 陸儉明：『陸儉明自選集』河南：河南教育出版社（1993）  
 CHARLES N. LI 等（1983）『漢語語法（Mandarin Chinese）』黃宣範訳，台北：  
     文鶴出版有限公司（1992）  
 萬清華：（1994）「關於“去”与“来”動詞的歸類」日本：中国語学会刊「中国語学」  
     242号（1995. a）  
     （1995）「『ストレス』による“去”と“来”の文法上の意味・機能について  
     の分析」，日本：神奈川大学大学院「言語と文化論集」第2号（1995. b）  
     （1996）「句法語音結構導論」日本：神奈川大学図書館製本（1996）。

（1996年8月・日本神奈川大学大学院）